

「時代」の激流に飲み込まれた

近世の五霞

安土・桃山時代

【小笠原氏の城下町時代】



第4回 ごか町の 歴史

歴史が語られることもなく
静かに眠り続ける五霞の町

縄文から江戸時代にかけて、
いつの時代でも五霞町は
関東の歴史の真ん中にいた



五霞は栗橋城の城下町であり、鎌倉街道の宿場町でもあり、房川渡しの関所でもあった。

- ・元信濃守護を父に持つ小笠原秀政は、徳川家康の関東入府時に当地を含め3万石の領地を与えられました。
- ・豊臣秀吉が破却した古河城を復元するまでの5年間、秀政は、栗橋城(五霞)を居城にしました。
- ・その間、義父の松平信康(家康の長男)の菩提を弔うため、隆岩寺を建立。秀政の妻・登久姫(信長と家康の孫)は隆岩寺で父の菩提を弔い、法宣寺で安産祈願をおこない、嫡男・忠脩(ただなが)が元栗橋で誕生しています。
- ・元栗橋は城下町として整備され、信濃町などもでき、古文書によれば、信濃にルーツを持ち、当地に土着した子孫の方もおられます。

江戸時代初期 【利根川東遷事業】

江戸と五霞の運命を変えた大事業



江戸：低湿地→大都会へ
五霞：城下町→水害の村へ

【東遷事業の要・赤堀川の開削】

- ・総責任者：伊奈備前守忠次、息子忠政、忠治の親子三代
- ・開発期間：元和7年(1621)～承応3年(1654)の34年間
- ・開削場所：権現堂の分岐点から境町までの川妻村北側の7km

●利根川が自然にまかせて流れていた時代、洪水の影響を全く受けなかった五霞が、一転して、常に水害に苦しむ村へ変貌。



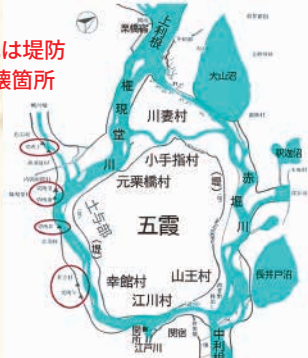
←濁流で困難を極めた
権現堂堤の修復作業も
「順礼母娘」の人柱で
洪水が治まり無事に完了

- 四方を水に囲まれ、常に
水害の危険にさらされながら
水が自由にならない村、
それが五霞。

こんな五霞に誰がした!!

「権現様、末代まで
お恨み申し上げます」

赤丸は堤防
決壊箇所



水に囲まれた暮らし
—水害の五霞—



五霞には今も水屋と小舟が
残っているお宅があります。

○お問い合わせ 教育委員会 生涯学習係／五霞町の文化財を守る会 ☎(84)1460(直通)